



第五中学校区(一)



恨みの杭

昔、森近に母市（仮名）という悪党が住んでいた。大酒のみで、けんか好き、仕事もろくにしないで、毎日ぼくちを打ったり、人の物を盗んだり、手のつけられない悪事をつづけていたので、村中からにくまれていた。

村の人々は何とかして、彼をなきものにする以外、村の難儀は救われないと、数人の勇気のある男たちが、ひそかに彼の殺害を計画し、風雨の強いある晩、急襲して、母市を打ち殺し、裏山へ運んで深いたて穴の中に深く埋めて、四本の杭を打ちこんでしまった。

あとに残された妻は、ひとり子の男の子に、父の非業の死に対し、村人に復しゅうするよう教えこんだ。男の子は父の悪人ぶりは知らされないで育ったので、いちずに村人をうらみ、復しゅうに執念をもやした。

生長した彼は領主松平越中守の家老の仲間（ちゅうげん）奉公をし、次第に認められ、とうとう家老を通じ領主を動かすまでの信頼を得た。

領主から母市殺しの詮議の報せを受けて、森近の村は上を下への大さわぎ、事の重大を知り、剛腹の庄屋某は、罪を一身に引受ける覚悟で直接母市殺しの下手人を逃亡させた。直接の下手人の人たちは、とうとう村に帰って来なかった。一方、復しゅうの恨みを果した俵もその後、行方不明となった。

森近の観音さん

森近の観音さんはあらたかで、小山大工が山横沢から森近へ帰る途中、暗闇にランプの光りを得て帰宅した話は有名。

また森近では「ざんざら松」とも「天狗の腰かけ松」ともいう古木の松が断崖の道の突端に枝を垂れて、いま一本「かさ松」といわれているのと、この急坂の山道の奇勝としての存在であった。

もと庄屋をした小山家の先々代（慶応年間か明治初期）信仰からか浄土三部経を石一つ一つに筆書して、これをこのざんざら松のそば僅かな平坦地に埋め、その上に供養塔を建立したという。

日がたち年を経て昭和三十年ころか、有名なざんざら松も松喰虫の害で枯れてしまい、供養塔も風雪に傾き、いまは見るかげもない。大工小山がお礼に植えた松もそのあともないが、思うにこの供養塔にまつわる物語りであろうか。

森近の湯 (一)

森近に湯の沢というところがある。（一説に大工の松幸が観音様を日ごろ信仰していたのが夢知せて湯の出ることを知ったともある。

この湯は実は田圃の大切な用水であったため、部落の人は湯が出ぬよう地蔵様を祀ってお祈りしたら、お湯が出なくなったそうである。ところが山を越えて隣村山横沢側の谷合いにどつとばかり湧出

したのには土地の人も驚き、これはてつきり森近の者が地藏様を建ててお祈りしたから、逆にこっちの方へお湯が噴き出してきたのだ。これではこっちの水田の稲が全部駄目になってしまふ。そこで代表者が森近の人達と話し合いをした結果、そのお地藏さんを山の境界（頂上）に安置することにしたら、どちらにもお湯は出なくなつたという。

しかし湯の沢の鉱泉は皮膚病などに効果がある硫黄泉で、ここから部落まで引水してお湯屋を始めたら随分湯治客が集つたという。

ところが湯屋を開業して間もなく娘がどうしたことか足が曲らなくなつたという。いろいろ医者にみせても治療しても歩けなく、ほとほと困つた主人が村の先達（神官）にみてもらつたら、お湯屋を開業しながら薬師様を祭らぬあたりだと占いに出たという。

主人は非常に恐縮して、さっそく町へ行つて、三体の仏像を求めて、一字を建てお供養申し上げたところ、娘さんの足はいつとはなしに歩けるようになり、すくすく成人してお嫁さんになつたという。

三体の仏像のうち観音像はないが、湯やを廃業した小山家の奥座敷には、薬師如来の尊像（丈六十cmばかり）と毘沙門天像の二体が今に安置されてある。

森近の湯の沢の鉱泉の湧くところどころには湯花がたまつており、お湯の効用を知っている人たちは桶に汲みとつて自宅の湯槽で湯治しているものもある。

お湯屋はもと湯の沢で家を建ててやつたのだが、ある冬、雪の深い日に主人が病氣になつたが、医者も行けないほどだったので、これにこりて、部落まで千五百mも竹で湯を引いて来たのだそうです

が、明治三十年の赤痢の大流行と大凶作年にお客がまる切り途絶えたので廃業し、その後はだれも企業的に関心を持たず今日に至つてののです。

森近の湯 (一)

森近の湯の沢に、皮膚病にとてもよく効く温泉が、その昔あつた。これは森近の小山某なる者が、観音様の靈夢によつて発見したものであると言われている。

小山某は、その湯元に小屋をたてて、浴客の便宜をはからつたので四方より湯治客が集まつて賑やかになつていった。

小山某は又湯つぼの傍に観音像を安置した。しかしこの熱湯があふれて、流れだす下流の水田は、稲が枯れるという騒ぎがあつたので村人たちは、その観音像をこっそり盗みだして、山横沢の畔に移した。

その事があつてから、熱湯は次第に冷泉にかわつていったという。

どう坂

森近部落に「どう」という地名がある。

市道川東線の森近、田島間の森近よりの火葬場の近くである。

言伝えによると、八石城が落城に先だつて一人の武者が嶺伝いに落ちのびて、ここへ下つて来たが、「どう」と馬をとどめ道行く人に

八石城の様子をたずねたら、今落城したと知らしたので、がっくりとなり、命果てたとのことで、その坂道は「どう坂」と言っている。

高橋九郎の頭

昔、行兼の新保の山に、高橋九郎頭（九郎治とも伝えらる）というものが城を築いたことがある。この城主が八石山の城主と戦って散々に敗れた。そして逃れて今の宇袋谷の隠家というところに、しばらく隠れていたそうである。（隠家の名のあるわけ）

昔、戦死した主なるもの十三人を埋めた場所は、現在の十三塚のあるところである。

この高橋九郎頭は隣部落の宮の下の高橋一家の大祖先であるということにもなっている。

いまでも高橋まきの者は十三塚詣りに行くそうである。

これから高橋九郎頭の祖先是新田義貞であると言伝えられているが真偽の証左になるものはない。

昔の婆さんたちは子守をしながら、子どもをあやすわらべ歌に、「高橋九郎の頭は新田の子孫だ、新田の子孫だ」とよく歌ったものだそうだ。

石塚家の祖先

行兼部落石塚家の祖先是上州館林の藩士であったという。はじめ

石塚家の祖先是役向きの都合で当時の上条久米の庄屋山崎家に足を止めていた。官金か何かのいきさつで、久米にいたことが出来なくなり、山崎氏の世話で行兼に居を定めるようになったそうである。

山崎氏は加納の清滝寺の檀家であった。氏の世話によって行兼の住民となった石塚家も当然、清滝寺檀家になった。当時、地方における寺の勢力というものは広大なものであったそうである。その後、石塚家が石曾根の庄屋をつとめるに及んで、地内の西之入安住寺の檀家でないことが総ての点において不都合であったため、熟考の上清滝寺には無断で改宗し、安住寺の檀家になった。この事を聞き及んだ清滝寺からは、果してきびしい掛合いがやってきた。事情を明かした石塚家では分家のだいまん一家を清滝寺檀家として、この家のまきが将来に如何に繁昌しても、それは全部清滝寺檀家たることという条件のもとに素志をとげたのである。

そういら事情から石塚家は安住寺檀家であるのに、その分家たるだいまん一族は加納檀家であるのである。

（注）因に同家の庭にある石を甲子楼文庫十九巻では津波石と掲載しており、刈羽郡誌には、その形が鱗に似ているので佐橋の庄を鱗石と改称した起因の石だとしてある。

関守付近伝説

宮の下部落の字関守の今の観音堂のある付近にはその昔、関守山持元寺という寺があったそうだ。

また、小山甚作氏（死）の宅の後山には城があったとのことであ

る。甚作氏の宅を城（じょう）と呼んでおり、後の山を城山と言っているのもうなずける。一体関守の今の（亡）小山寅吉氏の祖先はこの官の下部落の草分けだという説がある（重左エ門説もある）が善根の浄興寺と関守とは随分古いものらしい。

昔は関守で火種が絶えると善根の浄興寺までもらいに行かねばならないし、浄興寺で火種が絶えれば関守まで来て、もらったもんだと伝えられている。

関守付近から時々燈籠型をした石塔らしいものが発掘され、現に関守の人たちは、発掘したものを庭に立てて置く家もある。

今の小山彦一氏の親が、かつて城山のあたりで、銅製の板に、こまかい戒名らしい文字がたくさん彫りつけてあるのを発掘したことがある。しかし同氏は昔かたぎの人なので、たたりを怖れて人知れず藪の中へ深く埋めてしまったのだ。

幾年か後、死期間近かにそのことを話されたので、関守の若者たちが話の場所らしい所を掘り返して見たが、腐蝕したのか、場所がちがったのか、ついに見当らなかつたそうである。

元助 稲荷の話

宮の下部落、家号元助のあたりに昔稲荷が祀ってあったところが当時の人たちは、あまり稲荷さんを信仰しなかつたと見えて、祠は荒廃し、雑草は生え茂り、ぼうぼうとして見るかげもない状態となつた。

稲荷さんは、よくよくこの土地に愛想をつかさね、ある夜ついに

安田の慶福寺さんまで逃げて行かれた。しかし、しばらく過ぎるとさすがに故郷が恋しくなってきたが、あの荒れ果てた住家へ帰る気になれない、そこである夜、自分の意中を元助の家人に夢知らせに伝えた。

元助の主人は大いにおそれいって、そのころ神官佐藤様からお祭りをしていただき、祠の境内をすっかりきれいに手入れして、安田へお迎えに行つて、再び来て鎮座してもらつたと言伝えられている。

徳右エ門淵

時代はいつのころか、西之入の徳右エ門の家へ山横沢（今の八王子）の縁家の子どもが、盆の七日日に遊びに来た。徳右エ門は大川で泳がせてやろうと、田島の川原まで来た。大ぜいの子どもたちが水遊びに興じていたので、山横沢の子もついつり込まれて遊んでいるうちに、土地不案内のため、深みにはまってしまった。びっくりした徳右エ門は、すわとばかり飛び込んだものの、底知れぬ淵と流れの渦に、どうしても泳ぎ切れず、浮きつ沈みつしているうちに、ついに沈み切りになり可愛そうにも死体となつて上つたのである。それからこの深い淵は徳右エ門淵と呼ばれる。

蛇の神

享保六年八月二十六日の夕方、神主五十嵐伊豫正藤原広納当社

(鯖石神社) 動行していると、鳥居の内に臥木のように横たわっているものがある。御灯しをさし出しよく見ると、大きな蛇である。頭と尾とは双方の藪の中にかくれて見えないが背中と思うところ金色に光り輝いて、一m位動いたところを見て非常に驚き——中略——そこで神様に「何故にこのような見苦しいものをおつかい遊ばれて、私どもを驚かせ給うのですか、これから以後二度と人の目に見当らぬよう何処なりとも御神力で追払って下さい」と申し上げ再拜して帰ったところ、その蛇は不思議や鳥居の外にづり出て三つに切れ死んでいた。大きさといい、光りといひ誠にもものすごい身を震わせて帰宅し、家人及び村人に語ったところ、みんな怖れをなし、後難を恐れて、種々協議の末、村中一軒に一人の人足を出し、蛇を鯖石川まで引き出し、ついにこれを始末した。

その後何事もなかったが、広納死亡の時より代々の神主死亡の際には必ず蛇の亡霊の長虫が出て、死ぬと伝えられている。

石會根帯刀(いしぞね たてわき)と安住寺

西之入部落入口に向って左方の段丘、茶園山と通称されている頂上に小さい石の祠がある。これが佐橋の荘の地頭石會根帯刀(いしぞねたてわき)の居城の趾である。

西之入部落にある曹洞宗の安住寺は部落を入るとこの茶園山を背にしたところにある古い寺である。

古文書によると、開山は大永三年末十一月二日入寂(一五二三)

の曇芳文普和尚一北条毛利丹後守高広公の御弟となっており、開基が、この石會根帯刀だとされている。

地頭石會根帯刀の勢力と代々この一族がどのようにして来たかはわからないが、とにかく帯刀のある時期に大流行した悪疫(あくえき)のため家族がごとく死滅してしまったといわれている。

そして、たまたま諸国へ旅していた血縁の一人が帰国してこの事を知り、当時火災のため焼失していた安住寺を天和三年(一六八三年)に供養のため再建したのが現在の(外部改装)寺だという。

現在の大字名(石會根)の由来もここにあるとすれば、当時の勢力下にあった部落は笹崎四〇戸行兼四五戸宮之下八〇戸西之入一一〇戸小清水七〇戸の五部落であったであろうか、このほか秋津地域も一部入っていたかも知れない。

安住寺の木喰仏

西之入の安住寺にある木喰上人作三十三体の仏像(観音像)については早くから研究家が調査されている。

何しろ、伝えられているところでは、上人八十七才の高齢のときたまたまこの寺に足を止め、寺庭に雨おおいを造らせて、その中で老戯もいとわずに仕事をされたという。

当時、上人が仏像を刻むことを聞いた部落の若い者達は、好奇心のあまり、仕事場ののぞき見ようと出かけるといふ。人の気配を察すると上人はびたりと、のみの手を休めたという。そしてだれも来ない夜の時間を見すまして、一心不乱に製作に精根を傾けられ、一

日二体を仕上げるというはかどり方だったといわれている。

そして、その当時は庭の側の小高い丘の上に堂を建て特に仏像をおさめ、供養を怠らなかつたとのことであるが、いまは本堂大廊下の突当りに安置し、時折り訪れる研究、調査家の眼にふれていることも数少なくない。

新太郎狐

昔、茶園山に年とつた狐が住んでいた。どうしたわけか、この古狐は新太郎狐と呼ばれていた。

新太郎はりこうな狐で、寺の老僧が在方の仏事法要などへ出かけるのをちゃんと知っていて、夕方、方丈様がどぶろくを馳走になり、粟（あわ）のまんまに大根菜の味噌汁とすっかり、いいごきげんの千鳥足で、島の脇の村道をぶらりぶらりと、手にはおみやげのわらのつとにつつまれた、いもの子の煮たのと油揚げ二、三枚、文句にならない念仏都々逸といった具合に、クローズアップされると、新太郎狐は必ずといっていい程、こつせんと姿を現わして、びよこりとお帰りなさいと出迎えたそうである。そうして、寺の門口で老僧からだちんの油揚げをわらつとからつまみ、投げ出されると、ぱっくりとくわえ、喜び勇んで消え去ってしまう。

老僧出迎えの行事も続き、評判も高くなつたが、困窮（こんきゅう）な年が続き老狐への恵みも少なくなつた凶年の冬、百姓家の鶏を喰い荒したので、ついに虎ばさみにかかつて殺されたという。

子守地蔵（田島）

田島部落に子守地蔵という地蔵があつた。この付近の田、四、五〇aは人手にからなくなつても、この地蔵様が水をかけてくれるといので、村民からとても有難がられ感謝されていた。

その昔、子守地蔵があつたころ、歌われていた童べ歌に

朝日さす 夕日輝く

一六三の木の下の

漆千ばい 塩千ばい 金千ばい

子守地蔵という名称はこんなところから出たそうだ。非常に子どもを可愛がる地蔵様で、村内の人々は山へ行く時は、皆地蔵様にお守り頼んで出かけたそうだ。そして夕方山から帰つて来る時、子どもが世話になつたと四季それぞれの花や木の実を供えて礼とした。

この子守地蔵の安置された場所の開発は特に古いらしく、太古、石で造つた石器類が往時出土したもので、話の伝承者もいまは物故したが石の剣を握り出し所持していると言っていた。

（甲子楼文庫十九卷四七二頁にも見える）

ここでは、

漆千瓶 朱千瓶 黄金千瓶 となつている。

三九郎は甚之丞土中より発掘とある。

普広寺の押合祭

田島の普広寺の毘沙門天は樺の木で作られ、浦佐のと同じ木の、

元の方だとの説がある。

昔から七月十二日の夜から始つて、十三日は大般若法会の後、押合祭となるのだが、暑い盛りの夕方、近郷近在から、遠くはわらじがけて、あるいは浴衣にうちわを腰にはさんだ夏姿、女どもはちりめんの湯もじの尻端折り、色のついたこうもりがさ、百姓たちもそのころはどこへも行かず、部落に沢山若い衆もいて、命日（休日）ともなれば、それこそ村中あげて休んだものだ。ちょうどそのころは夏蚕もあがり白い繭も見え賑やかなことは一とおりでなかった。香具師（やし）や氷水屋などもたくさん来て、今日では想像もできない賑やかさであつたという。

小清水の祖先

先祖は信濃国諏訪の住人、従五位下金刺舎人若嶋と申すもの（三男、諏訪広定と申す者（宮沢の先祖か）宝龜十一年五月朔日（ついでち）信濃国を出立し、いにしえ越後の国と申すは我御祖神、建御名方命御誕生の地であるから、定めしよい所もあつたらうと、この地に来た。

日が暮れて野宿しようとしたくをしていたところ、白髪の老人白衣を着て忽然として現われ、妙な御声にて申されるには、われはこの地守護の主である。お前がここに来たのは誠に道に叶っている。これより私の教えに従いなさい。この清水の麓は鱒石の荘、小清水といつて住みよい所である。お前はここに安住しなさい。こう言うのと、たちまち白衣の老人の姿は消えてしまった。広定は神のお告げ

と、おそれかしくみ、さつそく郷里諏訪にたち帰り、このことを親父に告げたところ、御親父が申されるには、人家なき深山に入り、右様のことあるは、これこそ御大祖のお告げにちがいない。お前はこれから直ちにそこに住みつきなさい。これはわが諏訪大明神のおみちびきであるとして、諏訪大明神を奉請した。

（小清水鱒石神社御鎮座帳より抄）

福昌寺改宗の由来

福昌寺は春日山林泉寺の末寺と言われている。

十一代随和尚の時、この住持が檀家と相容れないものがあつた。腹にすえかねてか、恨み骨髄（骨の中）に達した結果か、秘法を修して、小僧さんに術をかけたのだ。すると小僧さんが、庭を掃く筈の先に火焰がちよろちよろと燃え上り、これはとたき消そうとすれば更に火勢が拡まり、ついに寺はもちろん、部落の住家あらかたを灰にしてしまった。そして和尚はそれきり姿が見えなくなった。

この大火で焼失をまぬかれたのは、和尚排斥（はいせき）の議に加わらなかつたほんの一部の人だけの家だつたとのことである。

その大火の日は二十日であつたというので、部落では「二十日の悪日」といって、旅行や行事などには縁起をいってその日をさけることにしている。

真言宗秘密の法を修したのをきらつて改宗したのかも知れないが、今では福昌寺は曹洞宗禅寺である。

（注）甲子楼文庫十九卷

開基、慶安三年、春日山林泉寺末、檀家一六〇戸とある。

牛池、ごぎが池

山室の部落から地続きで小国地籍の字池の原一帯は、山室部落の人が所有し耕作している。そこに牛池とごぎが池の二つの池がある。牛池は牛が死んでいたところからその名がついたといい、ごぎが池は人がごぎをきて道中し、水を求めて池に入り、泥の深みに、はまりはえ上れずにそのまま沈んでしまい、ごぎだけが浮いていたという言い伝えになっている。

泥棒屋敷

山室部落の字水沢入という深い谷間の東側の丘陵地があり、ここを通称「屋敷田」といつている。

ここは泥棒が住んでいた屋敷跡を田にしたので、屋敷田の名があるのだという。

耕地整理するため、十年ほど前に地面を一m程掘り下げたら、茶碗らしいものの破片や、古銭が十三枚も出てきたという。

その近くの「はんのきだて」という地名の坂道の中程には貝の化石が層をなして出てくるから、関連して先住者のいたことが考えられる。

黄金の馬

山室に長者原あって、昔長者が住んでいた所といわれ、長者が死ぬとき、家宝の床置き、「黄金の馬」を地中に埋めておいたという語り伝いがあった。

ある年 その塚から毎夜金色の煙りがたちのぼるといいうわさがひろまった。

山室のものずきが「黄金の馬」の彫り物を探しだし 一もうけしようと 煙りをたよりに掘っていったら大きな石があった。

すっかり気が狂った好事家は

「黄金の馬だ 黄金の馬だ」

と 歓声をあげてもち上げたが その石の重量にたえかねて、石におしつぶされて死んだという。

朱がめを踏んだ馬

今から二百年位前のこと、私の家が下の畑にあって、二度火災を出し、現在のところへ移ったのだが、記録にある安政三年師走の三日の出火は二度目だというのだから、その前のことである。

火事の騒ぎに驚いて飼馬の白馬の姿が見えない、鎮火して跡片付けが始った夜明けのころになってもわからない。

どこかへ逃げたのかと、家人たちが案じていたところ、屋ころに

なつて、どこからともなく、とぼとぼと帰つて来た。

その時、だれが見付けたのか、白馬の片脚が真赤に染まっていたという。血に染まった脚をしらべても、どこといて傷らしいものもない。この騒ぎに火事場片付けの支配をしていた庄屋さんが寄つてこられ、「ふーむ、傷がなくてこの血の色とはおかしなことだが、さて、これはきつとどこかで朱がめを踏みつぶしてきたに違いない。これは大変だ」と驚いた。

金、銀にも比して宝物視されていた往時の朱、その朱を貯えてある朱がめを埋めてあるどこかをこの白馬が逃げ廻っている途中に踏み込んだに違いなかったというので、皆が驚いたのも無理はない。その朱がめのありかを探したかどうか、今もって朱がめのありかはわからない。

長者ケ原

山室に、長者ケ原という小高い丘の平地がある。

むかし、長者が住んでいたというだけで、何も伝っているものもないが、わたしらの幼いころ、草塚や石塚が畑のそこここに点々としていた記憶がある。

明治初年に部落総出でこの草塚や石塚の取りこわし作業をした時、五輪の塔が一基出たと伝えられているが、その塔もどこへやったものか探すよすがもない。

しかし、槍の穂先きとか、刀剣らしい錆びたものが土中から一、二点発掘されたことがある。

しかし長者が この原の一個所に洞窟を掘って宝物をうめたといわれており、足でトンとふむと 穴の奥深くから うつろなひびきが届ってくるが そこが宝物をうめた穴倉だといわれている。

黄金が淵

山室のわたしの家に奉公していた娘が宿下りのため長者ケ原の道を通って隣部落の実家へ行く、ある年の秋の朝、鱒石川が淵になっているところへ下りていく途端、折から昇る旭日にさん然たる輝きを見せたその淵の一所所の水面の色彩の美しさ、金色まばゆい色とはこのことかと娘さんはびっくりし、きつとこれはこの淵に黄金が沈んでいるのではないかと話したそうであるが、だれもそんな底知れぬ気味の悪い淵にもぐり込む冒険家はないが、それからそこを黄金が淵と呼ぶようになった。

もぐらの休み場

山室の長者ケ原の中程に（今はない）大きいまん柿の老木があった。

どうした連想から成り立ってきたものか、わたしの家の伝説の一つとして、このまん柿は非常な老木で、この下には、もぐらの通り道があり、その道はどこまでも続き、お江戸から伊勢、京都までも通じていたと伝えられている。

そして化けもぐらは始終天下を廻り歩いていて、とくに上方（京都）へ行く時、このまん柿の下で一服して行くのを通例としたといわれている。

金の露

山室の長者ケ原の茶畑はかなり古い歴史がある。

ある朝茶畑を通りかかった作男が あつと驚いたという。

それは茶畑の茶の葉に光る朝露のほかに また別な美しい光り方を
するものが見えたからである。

大急ぎでその光をとらえようとした作男の眼から急に美しいものは消えた。

長者ケ原に埋もれている金銀の精が作男の眼に映つたのだろうといわれている。

一説には、あまりに美しい露の光りに、手にすくってなめて見たところ、甘露といおうか、蜜のようとも、何とも得も言われぬ美味しい味わいのものであつたが、一なめしたらもう消えたとも伝えられている。

長者ケ原の稲荷さん

山室の長者ケ原の一隅に稲荷の祠がある。伏見の稲荷さんの分霊といわれているが、わたしの代 前所有者から譲ってもらつたもの

である。

前の所有者（先祖に儀右エ門という人があつた。）の家で はるばる京の伏見へ参拜して稲荷さんのおずし（一説には位を受けたという）をお受けしようと申し出たら神社の方が帳面をくつてみて、「お前さん越後の儀右エ門という人は、おずしを受けて帰つたはずです。ここにちゃんと帳面に名前が載っています」

稲荷さん自身が伏見までおずしを受けに行つたということが今に語り伝えられている。

かけさば

山室のわたしの家の裏山に数右エ門という家があつたそうである。昔は年越から正月にかけて、べ縄やお供え餅を飾り それに縁起をかついで かけさば 鮭の小さいのを神棚に掲げるのを例としたという。

その家は爺さんや婆さんだけの家であつた。爺さんは本家（わたしの家）へ、お日待一前夜から身をきよめ、寝ずに日の出を待つて拝むこと一にきていた。留守居をしていた婆さんのところ、爺さんが出かけて間もなくに爺さんが帰つて来て、かけさばを食べて寝た。それから遅くなつてまた爺さんが帰つて来て、かけさばを食いたいという。ばあさんから さつき爺さんが帰つて、かけさばを食いたねたことを聞き、私たちの仕わざにちがいないと気づいたという。

怒つた爺さんと婆さんは 薪場にあつた一番太い枝を抜き出して、真暗い寝室へ そつと忍び込むが早いか 力まかせこ一番、真中

を夜具の上から叩きつけたら 一とたまりもなくやられるはずの爺さんに化けていた。私たちは キチキチキチと鳴きながら裏山へ逃げた。しまったという。

しよっから清水

山室に、しよっから清水という所がある。

左 山道

右 十日町街道

天然石の平面へ刻り込んだ字がそう示しているように 山室のこの道が十日町へ続いていたのである。

柏崎の浜から上った鬮を暗いうちに ポテに入れて肩でかついで十八Kmも歩いて来ると人間も疲れるし、魚もやけてくるので、山からどんどん流れ落ちる水で なれてきた鬮を洗って、一服のち十日町へ向ったというので この水を「しよっから清水」だと名づけたのだという。

舟つき場

昔、鱒石川が迂廻していたとき、西側松の山街道を山づたいに来た人は長者ヶ原から、渡し舟に乗って一ノ坂の十日町街道へ接続、旅行したわけである。

舟つき場の箇所ははっきりしないが、余程深い淵が想像される。

十日町街道の山際に「しよっから清水」が滝になっているそばに、馬頭観音を安置したあとが僅かに残っている。

昔、海賊がこの山奥に隠れ住んでいて、旅人から金銭、衣類を奪ったことがあり、川が改修され、山が開発されたころ、穴倉らしいところから、刀や槍など随分出てきたということである。

狐の手踊り

昔、山室の村の人が、町へ用達の帰り、もう日暮れに近いので、急いでやって来た村はずれ、疲れているせいか目の前が急に暗くなって来た。そして、あんなに暗れていたというのに、篠(しの)つくような大雨、鱒石川の水は見る見る増して、あれよの間なく、歩いている道を水しぶきがあがり始めた。そのうちに足元の土が崩れ落ち、とつきにつかまった一本の柳の根元にしがみついて、ごうごうと荒れ狂う流れに今にも巻き込まれる恐ろしさに、汗みずくになっていた。

ところがたまたま通りかかった名主さんが、柳に抱きついて、アップ、アップしている様子が変なので、ひょいと向うを見ると、狐が前足を踊るかっこうに左右に振っているのが見え、そのたびに悲鳴をあげて柳の木にしがみつくので、これは狐の仕わざだと思い、そばの石ころを思いきり強く投げつけると、こんどは狐がびっくり仰天して逃げ出したので、いままでの大洪水の様相も消え、夕方近い陽の明かりが村の山の端にまだ残っていたという。

機織りの神様

昔 山室に 機織りの上手な老婆がいた。

娘時代は 不器用で織り出す反物は 売り物にならなかつたのを苦にし 日夜黒姫様をおまいりしていた。黒姫の神は機織りの神様と言われていた。

ある年の七月一日の黒姫山の山開きの日、友達の娘たちと一しょに 黒姫山にお参りに行った時 姫が倉という岩屋の奥から 機織りの音がしてその音をきき それから機織りが上手になったと話していたという。

今でも この部落では姫が倉には 黒姫の神様が機を織っている。今でも この音を聞いた娘は 機織りの名人になると 信じられている。

六丁ぎねの音

六丁ぎねの音というのは 玄米を六人の若衆が 六丁のきねでトントントン トントントンとつく音です。

山室では 昔から神様も又六丁で玄米をおつきなさるといい そのきねの音を聞いた者はゆうふくなくらしをするといういい伝いがあります。だが 誰もまだ神様の六丁ぎねの音を聞いたものはありませんでした。

所が ある夜庄屋さんの次男坊が この神様の六丁ぎねの音を聞いたというのです。

その翌朝婿十日町の機屋さんから

「次男坊さんを家の婿にもらいたい」

という申しこみがあり 次男坊は

「いよいよ 俺にも運がむいてくるんだな」

と 十日町の機屋さんになる事にきめました。

十日町の機屋に行った次男坊は 機屋の仕事に精出したので 大繁昌し 裕福なぐらしをしました。

その後 この次男坊は 新田を開墾したり、などして 妻有第一の財産家になりましたと。

半兵エ力もち

大沢に半兵エ力持ちといわれた男がいた。いつのころか夜毎化物が出て、「ぼりょう、ぼりょう」と奴鳴って歩くので、住民たちは恐れおののいて夜は用達しにも出られない。

力じまんの半兵エがこの「ぼりょう」をたいじしようと思いたち、畜生め、今夜こそ、おれがつかまえて見せるぞ、と大いに意気込んで夜の更けるのを待って、化け物の出そうな場所へ出かけた。案のじょう気味悪い声で「ぼりょう（せおわれようの意）」と叫ぶ、だんだんその声について行くと、神社の裏側の断崖の中腹あたりに行った。

木の根岩の根っこにかじりつき、そこまで行くと、背中を出せと

いう、しめたとばかり、背中にした半兵エ力持ちは用意の荷縄でグルグルと体に巻きつけ、もとのところへはい上り、家へ来て、化け物をおろして見たら、これはまた何ということか、金色鮮かな物体です。黄金の精が土中に埋もれているのをきらつて、世に出してくれと訴えていたのであった。

半兵エ力持ちはとんでもない化け物退治で、すっかり長者になつたということである。

甚兵エどんの爺さ

大沢の甚兵エどんの爺さ婆さは人の好いことで評判の老夫婦、年がら年中貧乏で、それで不服そうな顔一つ見せたことがない。ある歳もせまった寒い日、婆さが根気に根気をかけて織り上げた縮布（ちぢみ）二反を風呂敷に包み、柏崎の間屋へ売りに出かけた。この縮布二反を売れば爺さ婆さ二人が年越正月のごちそうの材料をしこたま仕入れて来る事が出来る。

甚兵エ爺さを送り出した婆さは首を長くして待っていたが何しろ往復三十六Kmもの長道中を日帰りするのは大変の強行軍、その日は折悪しく暗い冷たい冬空で、みぞれまじりの風がビュービューうなりを立てて吹きつけている。半田へかかったころは風を真正面に受けて歩くので、なかなかかからない。さすがに疲れた甚兵エ爺さは、半田の六地藏様で一服して町へはひと息と、六地藏さんまでたどりつき、休ませてもらおうと腰をおろしかけて見たところ、お気の毒に六体の地藏さんは海からの浜風とみぞれをうちつけられ、今

にも泣き出しそうにして立ってござらっしゃる。やれ気の毒にこの寒さは、だれが身にも同じこと、さぞ冷たいことであろうと、可愛想に、気の毒にと称名をとなえ、背中の荷をおろして、大事な縮布二反で、地藏さんの体をグルグル巻きにしてやった。

「どうだね、地藏さん、ちつとは暖くなつたでしょう。ああ、いいことをして気持ちがいいわい」と甚兵エ爺さは町へ出るころなどすっかり忘れて、とぼとぼとわが家へ戻つて来た。そして婆さとけんかもせず、くたびれたろうからとどぶろく一杯いただいた酔いにくぐり寝込んだ。夜中にふと目をさますと木やり歌で大ぜいの人が甚兵エ爺さの家の前へくる気配、びっくりした老夫婦が何事かと起き出る間もなく、軒先へ来た木やりの一行が何やらどさん、どさんと荷をおろす。そしてその親方らしい人が大声で、わたしたちは半田の六地藏の使いの者である。今日この家の主人が大事な縮布で地藏様が寒かろうと、ぐるぐる巻いてくれた殊勝な気持ちをはじめ、金銀を礼とし授けるようにと、今晚持参した受取ってくれと言うと消え去るようにして人の気配はなくなった。そこにはお金や品物が沢山持ち込まれてあり、甚兵エ老夫婦はとても豊かな暮しになり、養子も迎えて幸福な生涯を送つたという。

榎、梨、柳の上方見物

大沢の榎峠には榎の大樹があつたのでこの名がある。

大沢部落の名称のものである豪族大沢次郎左エ門が関東より持参したと伝えられている。

頂上には榎、その下に柳、その下に梨の木を植えたところ。そし

て榎は目の神、梨は齒の神、柳は足の神として、それぞれの病に悩む人がその木の前に札を尽して信仰すればいかに難病でもなおる靈験があつたとのことである。

この三本の木がある年代三年統いて芽が出ないので人々はこの名木も枯れたのかと惜んでいたところ、ある年(その三年のうち)部落の有力者三人が年来の宿願であつた上方見物、伊勢参りをしたときのこと、京都の宿で泊つた際、宿帳に三人の名前を書き入れたのを見た宿の主人が「おかしなこともある。あなた方と同性同名の人がこの間泊つて出たばかり、どうしたことか」と問われたので一行三人はびっくりして「その三人はどこえ行くといつたか」と尋ねると「まだ旅を続けるとだけ言つて出かけた」という。

果せるかな三年たった春三本の木から青々とした芽が萌えたので、榎たちの上方見物に違いないと、不思議さにくたれ、今に語り伝えられている。

榎 峠 の 榎

大沢から仙田村赤谷や白倉へ通じる峠の頂上に古来榎の巨木があつた。それでこの峠を榎峠と呼ばれている。

昔、鉄道信越線が無かつたころ、いわゆる柏崎商人の三国越えする者は皆、この峠を越えたもので、陽春五月いわし、鯛の漁期には鮮魚が昼夜の別なく鈴をならしてつづきわたつた。

大沢榎はその頂上にあり、伝蔵茶屋を根元に、目通り一丈五尺(四m)の盛んな樹勢を誇り、木影から遙か佐渡が島まで見えたと
いう絶景は往きかえりの名所の名に恥じなかつたと思われる。茨目

のかたがり松と連立つて上方詣りしたとの伝説もあり、明治十四、五年のころ、この榎の木股にたまった水を眼につけると如何なる眼病もなおるといふ迷信が流布され、遠近大繁昌した。遂に事、官庁に聞え、迷信打破のため役人がこの榎を切り倒さんものと、利右エ門なる木挽に命じ、斧ふり上げて一打ち入れた途端、斧もろとも、谷底へ落ちたといふ勇しい伝説もあるが、残念ながら、昭和四十三年、道路拡張のために切り倒された。

傾城塚 (けいせいづか)

仙田赤谷から大沢へ越える大沢峠の一隅に傾城塚というところがある。

これにまつわる悲話が伝えられている。それは幕末のころ、佐渡の両津在にい、かつり漁師がいた。父は三年越しの病で家産が傾き、ひとり娘を五兩、十年契約で江戸の花街に売らざるを得なかつた。死ぬほどの苦勞もあつたが、幸に上州の呉服問屋の旦那に見染められ、援助の甲斐があつて十年の年期を果した。

彼女は帰途上州の旦那に男の服装を作ってもらい、三国峠を越え、疲れ切つた体で、ここ赤谷にたどりついた。余りの道中の疲れで道ばたに倒れていたところ、渋海川の渡し場の番人に助けてもらつた。しかし彼女はわが身の最後を覚えたものか、人々に身の上を語つた上、「早く佐渡の父母のもとに帰りたい。もし私が死んだら、佐渡の見える処に埋めてもらいたい」といつつ息を引きとつた。

村の人々は気の毒に思つて、遺言どおり大沢峠近くの佐渡の見える峰に埋葬してやつたといふ。

蛇の水

天明八年頃（西暦一七八八年）に、この地方に大洪水があったのである。それから数年経て、中の沢の池（今の紋十郎家のあたり）の主が暴れて水が舞うとだれやら言い伝えたが数日後、その水が全部押し出した。

島の上、城の下にあった家はこの時皆流されたが不思議に甚助家の屋敷だけは鍛冶屋のために流されなかったそうである。

甚助家の屋敷は今の薬師堂という共同墓地の東南窪地の隅にあった。

この大洪水事件を蛇水と言って今に言伝えている。

（注）蛇は金物をさらうと昔から言い伝えられている。それで鍛冶屋は流されなかった。

大沢の養蚕と和紙

大沢の養蚕は家号八右エ門という家の人が明治初年ころ、上州（群馬県）に日雇に行つて習いおぼえたのを伝えたものだとされている。しかし、和紙については、はっきりしない。大沢生紙（和紙）はいつのころか（大体明治初年といつていいが）どこから導入されたものか、鯖石郷では大沢だけが紙をすいたのである。

原料の楮（こうぞ）はどこにもあつたが、遠くは北条、南条あたりや高柳方面から運んだという。それも牛が一番の運搬力であつて、大沢の人の背によつて何万貫という楮が運ばれたのであるから驚

きである。

しかし、この大沢も今は一軒も紙をすく家がなくなつた。確かな統計はないが最盛時は製造した家が百二十余戸、平均一〇〇ペ（約四万枚）多い人は最高千ペも出したといつていい。

一ペ一円位にしても一万四、五千円の収入は部落の経済に大きなウェイトを持つたであろう。

おわが池（大輪が池）（一）

大輪が池の近くに石の祠がある。

この祠は大沢次郎左エ門が自分の恋のならぬを恨んで美人おまんを大輪が池に投げて殺したその怨霊（おんりょう）が夜毎夜毎に次郎左エ門を悩ませたので、その怨念の回向（えこう）をし、功德（くどく）のために祠を建て祠つたのだという。

おまんは生前、どじょうがきらいであつたので、おわが池のどじょうはだれも食べない、このためか、おわが池には「おわが池の化けどじょう」といわれるほど大きなどじょうがすんでいるという。

おわが池（二）

大沢部落から小清水峠を登ると 峠の中腹に大きな池がある 村人はおわが池という。

昔、大沢におわという美女があつて、小清水の某男と通じ 毎夜峠を越して 小清水の男性の所へ通つていた。

大沢の若者たちは 大いに怒つて 或夜峠で待ち伏せ 帰つて来

るおわを捕えて 左眼をくりぬいて 手足を縛ってこの池に投げた。
それ以来おわが池という。この池に住むどじょうは皆一眼だと言わ
れていた。

大沢という地名の由来

大沢部落の名は昔、大沢次郎左エ門という豪族がどこからか流れ
て、ここに住みついたのが始りと言われている。

豪族といっても、名字帯刀の士分格ではあるが実は野盗類か、盗
賊の一味であったかも知れないとされている。

対岸の者との交流は全然なかった。

火止地蔵

大沢に通称「かつぼ」という所がある。かつぼというのはお盆に、
お精霊菰などにする菰(まこも)のことであるが、そこに「火止め
地蔵」という石の地蔵がいまに草の中に「野の仏」としてひっそり
と立っている。

この由来は大沢の部落は鱈石川をはさんで東西に分かれて発達し、
西側がとて文化、宗教、経済の面では進んでいたらしい。

いつのころか東側に大火が起り、ほとんどの家が焼け出されてし
まう惨状だったが、火がかつぼの地蔵さんのところまで来ると紅蓮
の炎もぴたりと止んでしまっ、そこからは火勢は中絶されたとい
うので、地蔵様が守って下さったのだということから、この名があ
るのだと伝えられている。

大沢城の由来とコルクの木

北条に北条丹後守の居城があったことは一般に知られ、それと八
石城主毛利氏の確執「不和」と戦国衰史として伝えられているがそ
の流れをくむ一族だといわれているのに大沢城佐橋(鱈石)大和守
のことは余り知られていない。

しかし、馬場は部落の入口にあり、城趾として形がうかがわれる
堀なども残されている。

残されている語り伝えは上杉景虎が越後平定の時、北条丹後守も
打ちほろぼされ、弟分である鱈石大和守も一敗地にまみれて、あえ
ない最後をとげ落城したとのことである。

城主大和守が城を枕に自害するに先だち、そのころの宝物であった
朱を入れたかめを敵に渡すも残念と、どこかに埋めたとのことであ
るが、その場所は突きとめることが出来ないまま今日に及んでいる。
ただ驚くことは南方から持参したというコルクの木一本が未だに
存在して、往時の歴史を知ってか知らずか、枯れることなく、異国
の植物として今に生育していることだ。

